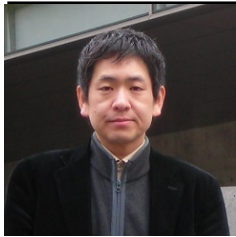


東海地方の豪商のまちと持続可能な観光 —高山市・美濃市・松阪市の歴史文化資源を活用した観光まちづくり—



末田智樹 SUETA, Tomoki

中部大学人文学部歴史地理学科教授

福岡県出身。岡山大学大学院文化科学研究科産業社会文化学専攻博士課程修了。博士（経済学・学術）。専門分野は経済史、商業経営史、歴史地理学。近世では捕鯨業史や伊勢商人の経営史、近代では三越・高島屋のほか名古屋市の松坂屋（伊藤家）など百貨店の研究を進めてきた。著書に『藩政捕鯨業の展開』（御茶の水書房、2004年）、『日本百貨店業成立史』（ミネルヴァ書房、2010年）、『老舗百貨店の接客法』（風媒社、2019年）、『日本百貨店業発展史』（ゆまに書房、2022年）がある。

ABSTRACT

In this project, we conducted a field survey of the historical and cultural tourist areas of the Tokai region. First, the role of two important traditional building preservation districts in Takayama City was clarified by comparing them. Second, in order to compare with Takayama City, we investigated Mino City, Gifu Prefecture, and Matsusaka City, Mie Prefecture, focusing on the tourist facilities of wealthy merchants in the Edo period. From this survey, it became clear about the current situation of sustainable tourism town development utilizing historical and cultural resources in each region.

1. はじめに

4年目の2022年度研究プロジェクトでは、引き続き高山市を中心に調査した。高山市では、江戸期に豪商による経営展開で繁栄をみせた商家町が観光地化し人気を博している。

そこで高山市を、岐阜県において美濃和紙で栄え、豪商の旧宅が並ぶ「うだつの上がる町並み」の商家町で知られる美濃市、および伊勢商人の本拠地として当時江戸へ進出した豪商を輩出し、現在観光地化を手掛けはじめた三重県松阪市と比較することにした。

今回は、3都市の歴史文化資源を活用した「観光まちづくり」を探るために、とくに歴史文化観光施設とそれを中心とした観光状況を調査した。2020年以來コロナ禍であったため各観光地域・施設の感染防止対策に着目しながら、本年度は歴史地理学科2年次の学生と一緒に現地調査を行った。

なお、本調査内容の一部が大幸財団2020年度第9回人文・社会科学系学術研究助成に採択されており、本年度も活用した。写真（図1～9）については筆者が現地で撮影したものである。

2. 三重県松阪市の歴史文化的観光まちづくりの特色

松阪市は伊勢湾に面する三重県の中勢エリアに位置し、江戸期において伊勢商人が活躍した商業町であった。同市で生産されてきた松阪牛は兵庫県の神戸牛、滋賀県の近江牛（もしくは山形県の米沢牛）と並ぶ日本三大和牛の産地で知られる。松阪市は昭和初期以降の商店街化と高度経済成長期における3つの百貨店の開業で、1960～1980年代に近代的商業都市として全盛期を迎え、三重県南勢の伊勢市とともに繁昌した中勢の中心的商業地であった。2006年12月に松阪駅前の三交百貨店が閉店した後は、市内からすべての百貨店が消失し地域経済に不安定さを招いた。

全国では、2010年代に入って地域主体の地域振興を目指す観光まちづくりの必要性が盛んに叫ばれるようになった。そして観光が、持続可能な地域づくりを支援し地域活性化に取り組むための地方創生における成長戦略の柱としても位置づけられるようになった。

この流れを受けて松阪市では 2010 年に「松阪まちなか再生プラン」を策定し、2011 年には「松坂城跡」が国史跡に指定された。次いで 2012 年には「松阪市観光戦略会議」を設置し、2013 年には「松阪経営文化セミナー」を開催するなど観光地化が進行し、松阪市が観光のまちへと変貌しはじめた。同市は都市計画として 2014 年に「“豪商のまち松阪”活き生きプラン」を作り、「観光交流拠点施設等整備事業に係る基本構想調査・基本計画策定業務公募型プロポーザル」が行われ、2016 年 4 月から（翌年 3 月まで）「豪商のまち松阪プロモーション事業計画」が動き出した。

松阪市では 2014 年と 2018 年に『松阪市観光振興ビジョン』を策定し、2021 年には新たな『松阪市観光振興ビジョン』を発表している。このビジョンのキャッチコピーは「豪商のまち」であり、松阪市は江戸期から商業町として発展した歴史を背景に、豪商の歴史文化施設や歴史文化関係の資料館、城跡の整備を進めた。そして、2019 年 4 月には観光事業の中核的拠点である「豪商のまち松阪 観光交流センター」を開設し、現在では松阪観光の拠点となっている。松阪市は高度経済成長期に商店街や大型商業施設によって三重県有数の商業地として栄えたのち、2000 年代以降は厳しい状況のなか歴史文化資源を活用し、2023 年からは「お肉のまち」をキーワードに加え、観光客の集客活動に力を入れている。

松阪市において三重県唯一のフルマラソン大会が「みえ松阪マラソン 2022」として誕生し、同年 12 月 18 日に開催された。この大会は、伊勢街道や和歌山街道を行きかう人々で賑わった城下町や偉業を成し遂げた偉人など、「豪商のまち松阪」を体感できるコースになっている。その意味では、江戸期の商人を語るうえで欠かせない大阪商人、近江商人と並んで三大商人にたとえられる伊勢商人のインパクトを理解できる歴史文化資源の恰好の宣伝になったと考えられる。

エントリー種目には 4 部門がみられた。具体的には松阪市川井町のクラギ文化ホール（市民文化会館）前をスタートし市内を巡るコースを走り、山下町の市総合運動公園がゴールとなる「フルマラソンの部」のほか、同公園を発着点とする「ジュージューの部（10km）」や「ニクの部（2.9km）」、「牛歩の部」（7.4km）が開催された。最後の部門は同文化ホールを出発して伊勢寺町の松阪農業公園ベルファームを目指すもので、松阪牛をかけた「お肉のまち松阪」をイメージさせるネーミングになっている。第 1 回大会ゲストとして、三重県出身で日本を代表するマラソンランナーであった瀬古利彦と野口みずきが招待され、非常に盛り上がった記念すべき大会となった。



図 1. 三井家発祥地
（市指定史跡）



図 2. 旧長谷川治郎兵衛家
（国指定重要文化財）



図 3. 豪商のまち
松阪観光交流センター

3. 岐阜県美濃市の歴史的文化的観光まちづくりの特色

美濃市は岐阜県中濃エリアの中央に位置し、同市で作られてきた美濃和紙は福井県の越前和紙、高知県の土佐和紙と並ぶ日本三大和紙の産地として有名である。この美濃和紙には「本美濃

紙、美濃手すき和紙、美濃機械すき和紙」の3種類があり、保存会の会員が一定の要件を満たした伝統の製法で漉いた和紙を「本美濃紙」とされる。美濃の手すき和紙は、「美濃和紙」として1985年に国の伝統的工芸品に指定された。本美濃紙は1969年に国の重要無形文化財に指定され、本美濃紙の手漉き技術は2014年にユネスコ無形文化遺産に登録された。この地域は長良川や板取川といった清流に育まれ、漉かれる美濃和紙の魅力は柔らかみのある繊細な風合いをもちつつ強靱で耐久性があり、そして薄くてムラがないという1300年以上にわたって伝統的技法が受け継がれてきたものである。

美濃市の観光キャッチフレーズは既述の「美濃和紙」と「うだつの上がる町並み」である。後者の「うだつ」とは江戸期における町家（建物）の屋根の両端に取り付けられた防火壁のことで、火事の際の類焼を防ぐために「卯」字形に張り出した小屋根付きの袖壁のことである。うだつは長屋建ての戸ごとの境に設置され装飾と防火を兼ねているが、当初はおもに防火の目的で造られた。設置に多額の費用を要したことから装飾の意味が強くなり、次第に富や成功の証の象徴となった。このため和紙問屋の豪商たちが、富を競いあうように立派なうだつを設けていった。

美濃市では、美濃和紙の里会館が1994年10月に「市制40周年」を記念して紙漉き職人町の地区に開館した。同年10月8日には「美濃市観光協会の市制40周年記念事業」として、「第1回美濃和紙あかりアート展」が開催された。このアート展には毎年、全国各地から応募されるようになり、2022年で第29回を迎えている。

その後、1999年5月3日には「重要伝統的建造物群保存地区（商家町）」に選定されたことから、同市は歴史文化資源を活かしたまちづくりに動き出した。美濃市では、2008年11月4日施行の「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律（歴史まちづくり法）」に基づき、「美濃市歴史的風致維持向上計画」を策定し、文部科学省、農林水産省、国土交通省に申請を行うことで2012年3月5日に認定を受けた。岐阜県内では高山市と恵那市に次ぐ3番目の認定であったが、2020年度に満了を迎えた。そこで美濃市では、さらに歴史的風致を維持向上し地域を活性化していくために「美濃市歴史的風致維持向上計画（第2期）」を策定し、既述の各省に申請を行って翌21年3月29日に認定を受けた。

これらのほか2015年には「美濃和紙伝承千年プロジェクト」を開始し、2016年には文化庁が「文化遺産を活かした地域活性化事業」に美濃市を認定した。同年に市役所では「観光課」から「美濃和紙推進課」へ名称を変更し、現在では同課のもと「観光推進係」と「美濃和紙推進係」が地域ブランドの向上と保存・継承、およびそれらを観光につなげる目的で活動している。また、2019年10月30日には「第7回中部における歴史まちづくり in 美濃」を開催し、2021年7月16日には文化庁に「美濃市文化財保存活用地域計画」が認定され、歴史文化資源を活かした観光まちづくりに力を入れている。



図4. うだつの上がる町並み



図5. 小坂家住宅
(国指定重要文化財)



図6. 美濃和紙の里会館

2016年4月には流域4市の岐阜・関・美濃・郡上市が官民連携組織「長良川流域観光推進協議会」を設立し、長良川を軸とした市町村の行政をなくした取り組みとして、同川が育む自然・文化・産業等を保全しつつ観光に活用する持続可能な観光地域づくりを進めてきた。この成果として「長良川流域文化」が2021年度の「世界の持続可能な観光地100選」に選出されている。

4. 高山市の歴史文化的観光まちづくりの特色

高山市では、歴史文化の貴重な観光資源として2つの「重要伝統的建造物群保存地区」がある。2つとは、1979年2月3日指定の「三町伝統的建造物群保存地区」と2004年7月6日指定の「下二之町大新町伝統的建造物群保存地区」である。1970年代から高山市において魅力ある空間作りへの取り組みが展開された結果、両地区とも商家町で重伝建の指定を受けるに至った。ひとつの市に2つの商家町の重伝建が隣接するのは、43道府県104市町村126地区のなかでは高山市のみである（2021年8月現在）。両地区には、毎年4月14・15日開催の「春の山王祭」と10月9・10開催の「秋の八幡祭」がある。前者は旧高山城下町南側の上町の氏神である日枝神社の例大祭、後者は旧高山城下町北側の下町の氏神である櫻山八幡宮の例大祭として挙行されてきた。

現在、上町は高山市内の人気の観光スポットで知られ、観光客のほとんどが訪問する高山観光の中心地として観光まちづくりを蓄積してきた。このため、全国の地方都市のなかでも有数な国際的観光地区として高い評価を受けている。それに対して下町は静かな町並みを呈し、より深く高山を楽しみたいという客層のみが訪問する重伝建地区と言えよう。今後、下町は居住空間が濃く残る地域の人々の生活の場として、これを上手く活かした開発が可能である。上町に比べて下町は、この意味での観光地として発展の余地が大きく、とくに古民家の新たな活用方法に期待が高まる。すなわち、上町にない魅力を補う形での下町の観光開発が望まれ、上町と下町が互いの魅力を補完しあう異なる歴史文化的空間を感じる全国唯一の隣接する重伝建地区である。

2020年7月に「行神橋」が、宮川朝市通りから行神橋周辺に人の流れを勧誘する目的で開通した。さらに、宮川朝市通りから本町商店街や周辺エリアに誘導する整備が行神橋の左岸側で進められ、2022年4月11日に賑わい創出施設として「飛騨高山にぎわい交流館 大政（だいまさ）」が開館した。この建物は、大正末期建築の町家であった「旧大政染物店」を改修したもので、観光客や市民の休憩、情報発信およびまちゼミ・学生等が自由に活用するために設置された。開館時間は9時から21時30分、休館日は年末年始、トイレは24時間年中無休で、FREE Wi-Fiが利用できる。中心市街地の活性化とまち歩きの楽しさを高める施設が開設され、本町商店街から下町の重伝建・屋台会館へのルートとなることが十分想定でき、今後の利用が期待されている。



図7. 下町の保護猫カフェ



図8. 大政の外観



図9. 本町商店街からみた行神橋

5. おわりに

豪商ゆかりの商家町を観光地化している高山市と比較するために、4 年目は同市のほか美濃市と松阪市を調査した。岐阜県には江戸期の豪商の旧宅を中心とした 2 つの重伝建地区を活かし歴史的文化観光地域を実現している高山市、地場産業である美濃和紙と重伝建地区を融合して推進する美濃市があり、両市とも「持続可能な地域社会の構築」を基盤に展開している。これらに比べ松阪市は観光地化の取り組みが浅いものの、「豪商のまち・お肉のまち」をキャッチフレーズとすることで三重県の観光地のなかで着目されはじめている。松阪市周辺の県内有数な観光地では鉄道を活用した誘客戦略を取り入れ、同市でもそれらとリンクした動きがみられる。

高山市では 1970 年代から自然と人文の地域資源から観光資源化が行われ、四季や歴史文化を活かしたイベントが続き展開され成功を収めてきた。他方では、市内を中心に観光的ウィークポイントを補うための施策を進めている。高山市は 2021 年 5 月に国の「SDGs 未来都市」に認定され、「世界を魅了し続ける『国際観光都市 飛騨高山』の実現」のキャッチフレーズを付けて持続可能な観光都市を目指している。美濃市では 2000 年代から、松阪市では 2010 年代から歴史文化資源を活用した持続可能な地域社会づくりが行われ、地場産業である前者の美濃和紙と後者の松阪牛のピーアールを重ねた「観光まちづくり」を推進している。

最後に歴史文化資源を活かした持続可能な観光への提案を述べておく。これらの地域では、歴史文化施設や特産物を活用した「観光まちづくり」が持続可能な観光につながっていると考えられる。しかし、各地域では社会経済・文化・環境への影響に十分配慮した観光でなければならない。また実現するためには、行政・住民・事業者による課題の把握と取り組める分野から実行する姿勢が重要である。したがって、各地域の行政と地元住民および観光事業者と観光客の相互の信頼関係を築こうとする心掛けが常に必要である。そして、このような地域主体の「観光まちづくり」をスムーズに進めるためには、それ以前に地域社会自体を存続する基盤づくりが不可欠である。

6. 主要参考文献（刊行順）

- (1) 松阪市史編さん委員会編（1983）『松阪市史 第 12 巻 史料篇 近世（2）経済』勁草書房。
- (2) 飛騨・高山 天領 300 年記念事業推進協議会編（1992）『飛騨高山 明治・大正・昭和史』同。
- (3) 三重県編（1998）『三重県史 資料編 近世 4（上）』同県。
- (4) 高山市企画管理部企画課編（2015）『高山市第 8 次総合計画』同市。
- (5) 林上編著（2018）『飛騨高山―地域の産業・社会・文化の歴史を読み解く』風媒社。
- (6) 歩いて楽しい道づくり実行委員会（歴文観部会）編（2019）『松阪のお宝発見―私たちが選んだ市民文化遺産（中心市街地編）』松阪中央住民協議会・幸まちづくり協議会。
- (7) 高山市教育委員会編（2019）『高山市史 近現代編（下）』同。
- (8) 三重県編（2020）『三重県史 通史編 近世 2』同県。
- (9) 高山商工会議所編（2021）『高山商工会議所ビジョン【NEXT takayama】』同。
- (10) 松阪市 HP：松阪市観光振興ビジョン（2021～2024 年度）；city.matsusaka.mie.jp（閲覧日 2023 年 2 月 20 日）。
- (11) みえ松阪マラソン 2022：https://mie-matsusaka-marathon.jp（閲覧日 2023 年 2 月 20 日）。
- (12) 長良川流域文化レッドデータブック：http://organweb.sakura.ne.jp/reddatabook/reddatabook2022.pdf（閲覧日 2023 年 2 月 20 日）。
- (13) 美濃市 HP：美濃和紙；http://www.city.mino.gifu.jp/folders/285（閲覧日 2023 年 2 月 20 日）。

付記

聞き取り調査では、松阪市観光協会の山本真帆様、射和文庫の竹川裕久様、美濃和紙の里会館の黒田直快様、美濃市美濃和紙推進課の渡邊貴彦様、高山市海外戦略課の永田友和様、同市雇用・産業創出課の小峠篤弥様、同市同課（飛騨高山にぎわい交流館「大政」）の角田智美様に多くのご教示を頂戴した。また本年度は、とくに人文学部歴史地理学科2年次の服部稜歩さん、圖師舞子さん、柴田雄亮君、古川郁哉君に参加してもらい調査を行った。

以上の皆さんに深く感謝申し上げます。



図 10. 歴史地理学科の参加学生
服部稜歩さん、圖師舞子さん（前列）
柴田雄亮君 古川郁哉君（後列）